

第5回「コミュニティ形成とアート」

【話題提供】

矢口龍太

石巻劇場芸術協会/ 複合エンタメ施設「シアターキネマティカ」代表。

宮城県石巻市出身。演劇や劇作活動の背景を持ち、2019年1月、石巻芸術協会の活動を始める。2022年8月にシアターキネマティカを開設し、劇場プログラムの企画運営を中心に、エンタメとコミュニティを中心とした活動を作っている。

阿部拓郎

石巻劇場芸術協会/ 複合エンタメ施設「シアターキネマティカ」副代表。

宮城県石巻出身。映画の上映や企画運営をしてきた背景があり、矢口とともに石巻芸術協会の活動を始め、シアターキネマティカの開設と同様の活動を行なっている。

矢口さんと阿部さんのお二人から、石巻市の複合エンタメ施設「シアターキネマティカ」を拠点に、演劇や映画のコミュニティだけでなく、地域の方とともにする活動を中心にお話いただいた。

戸田祥子

身体表現ワークショップ「てあわせ・のはら」代表。岩手県の小学校教諭を経て、特別支援(肢体不自由)学級の担任として勤める。自閉症の息子を持つ母親でもある。震災後に石巻市や東松島市を中心に、定例ワークショップ「てあわせ・のはら」を開催。いくつかの転機を乗り越えながら継続してきた活動の背景を中心にお話いただいた。

小松理虔

ライター、ローカルアクティビスト。福島県いわき市小名浜出身。2009年まで中国・上海で勤務し、その後いわき市で活動を始める。オルタナティブスペース UDOK を運営する。著書『新復興論』を出版。震災後の芸術祭の実施や外部からのアーティストや芸術活動の協力、自主企画によるアーツキャンプを運営する。2020年からアート NPO クリエイティブサポートレッツ(静岡県浜松市)に、彼らとの交流を通じて考えたことを文章にする作家として招聘される。これまでの活動から、アーティストと地域住民の接点やアートの役割についてお話いただいた。

【コメント】

ハキム・アフマドさん (アーティスト、KL スケッチネイション)

山名淳さん(研究者、東京大学)

林美帆 (公益財団法人水島地域環境再生財団)

志村春海 (石巻アートプロジェクト実行委員会)

松川広美 (てあわせのはら)

【石巻芸術協会__矢口龍太・阿部拓郎】

◇活動概要

2019年1月、石巻芸術協会の活動を開始しました。映画と演劇の活動を制作、企画運営を中心とした活動を始め、現在は、複合エンタメ施設「シアターキネマティカ」で演劇と映画を中心とした劇場のプログラムを企画運営しています。また、2人で毎週、映画と演劇を楽しむラジオ番組も運営しています。

◇活動コンセプト

「街に火を灯す」、つまり市民が映画や演劇に親しめる機会があることを当たり前にしていくことや、そして「温故知新」ということで、石巻にかつてあった映画・演劇文化をアップデートし、若者からシニアまで、市内外の人が楽しめる街にすることをコンセプトに掲げ、活動しています。また、空き家活用と施設運営により、映画と演劇を楽しめる「まちの劇場」づくりを行なっています。

◇シアターキネマティカ・プロジェクト

令和3年7月にシアターキネマティカ・プロジェクトを始動しました。クラウドファンディングと自己負担金で、空き店舗をDIY改修し、劇場を作るプロジェクトです。基本的には、映画や演劇を見る場所ではありますが、地域の方たちが集まれる場所にもしたいと考え、劇場部分だけでなくコミュニティ・スペースとして、カフェやバーも併設しています。建物の改修は、ワークショップ形式にしながらDIYで進めていきました。

2022年8月に改修が終わり、シアターキネマティカの施設が完成しました。現在、普段はカフェ店員として店に立ちながら、劇場プログラムの企画運営をしています。

施設を運営しているのは石巻芸術協会ですが、何をやるにしても地域を主語にして、町の人々と一緒にするようにしています。

◇ザッツ・エンターテイメント

「文化芸術が関係人口をもたらす」とか「コミュニティづくり」といった言い方もありますが、それらの意味をまとめて、「エンターテイメント」という言葉に置き換えています。何が起ころうとも「それもエンタメのひとつだ」というふうにおもしろおかしく発信して、みんなに楽しんでもらえるように意識しています。

プレイヤーは映画演劇に関心がある人が中心ですが、自ら参加してくれる地域の方もいます。アートや演劇といった限定的なコミュニティではなく、シアターキネマティカを拠点として、エンタメを楽しみながら、広がっていくコミュニティになっています。

【てあわせのはら 石巻実践のはじまりとその後__戸田祥子】

◇活動概要

石巻や東松島を中心に、定例ワークショップ「てあわせ・のはら」の活動を行なっています。活動のきっかけは、2011年に仙台を訪問された三輪敬之先生(早稲田大学)と西洋子先生(東洋英和女学院大学)が、2012年に開催された第1回定例ワークショップに参加したのが始まりでした。当時、自閉症の息子(智之)とともに参加しました。

◇3つの転機

これまで約10年間活動する中で、大きく3つの転機がありました。

1つ目は、三輪先生と西先生が、研究費の期限終了に伴い参加できなくなったことです。以来、ファシリテーターが不在になったため、自分たちでファシリテーター養成講座の企画をしたり、リレー形式でファシリテーターを担当してワークショップをするようになりました。

2つ目は、世話人役の森雅彦先生(元石巻支援学校)が参加できなくなったことです。そこで、まずメンバーで今後やりたいことを出し合いました。障害のある子どもたち自身もファシリテーターになることで、子どもたちにも成長が見られました。彼らはいま、「自分たちがWSにいないければ『てあわせ』は成り立たない」と思っています。

3つ目は、コロナ禍での活動です。集まることができなかつたため、「チームルーム」というアプリを用いて、一人で手合わせを表現する動画を送り合う「てあわせレター」というワークショップを行いました。

また、演目「海」の制作をし、東松島市の海でいつか上演したいと考えています。

松川：私は障害のある子どもを持つひとりの母親で、活動に関わるまでは全くの素人でした。震災で色んなことが変わってしまいましたが、表現活動に出会い、日常の恵まれた環境に改めて気づきました。また、生活の中で表現したいことや、ともに表現する人たちがいることによって、人のあたたかみや互いの良さに気づけたと思います。

【復興とアート__小松理虔】

◇活動概要

福島県いわき市小名浜でオルタナティブスペース UDOK を運営しています。震災後のモヤモヤをそれぞれが抱えて、何か爆発させたいという衝動的なものが渦巻いていた時期に場所を作ったため、音楽をする人や絵を描く人など、何かやりたい人たちが集まってきました。

◇人の根っこにある創造性をポジティブに捉える

表現したい地元の人たちが集まってきたその流れで、「小名浜本町通り芸術祭」(2013-2018)を開催しました。それぞれが得意とする表現活動を用い、作品の展示やグラフィティ、DJ、ワークショップなどを行いました。

著名性や売れているなどの評価軸ではなく、「それいいね」と認めて、自分の創造性で作品を作っているのだから、「俺たちも芸術家じゃん」という考えを大事にしています。

- ・低予算のアートプロジェクト（15万円くらい）
- ・5回開催
- ・市井の人たちの表現をまちなかに展示
- ・まち歩きやスケッチ大会などで作品を作成
 - ▷オルタナティブスペースがあったため中心になれた
- ・いわきにゆかりのある作家にも声がけ
- ・写真、イラスト、絵画、コラージュ、ワークショップ、トークet
 - ▷手づくりの市民芸術祭のようなスタイル
- ・著名な作家を連れてきても意味がない
- ・そこに暮らす人たちの創造性を認めないと始まらない
- ・オレたちにもできじゃんという謎の自己肯定感

◇作家の表現によって飛び火していく

東京を中心に活動するアート・コレクティブ「カオスラウンジ」がいわきを訪れ、作品展示と演劇を中心にした「カオスラウンジ新芸術祭『市街劇シリーズ』」(2015-2017)を行いました。この芸術祭は、外部作家がいわき市で長期的にリサーチし、作品を作る形式です。私は、地元住民から物件の借用、20名程度のアーティストの受け入れ、現地移動の運転手など、地域側のコーディネーターとしてサポートしました。

作家らは、「いわきの人たちのためにやっているわけではない」と言います。しかし、地元の人には想像できないような飛躍した発想や方法で、いわきの歴史や文化を引き継ぎながら表現をしていると思います。炭鉱中心主義的な歴史から続いている、日本のエネルギー産業を背負わされる構図自体を暴力性として捉える彼らの視点によって、自分自身の内側が揺さぶられる感覚が生まれていきました。この芸術祭をきっかけに、『新復興論』の執筆に至りました。

- ・いわきに眠る文化や伝承を下敷きに作品制作。
初年度：徳一と袋中、2年目：X会と八大龍王、3年目：虜仏毀釈
各地に展示し、その場所をめぐる「市街劇」という体裁の芸術祭
- ・作家たちは地元の人たちに「寄り添わなかった」が、その土地にたかもしれない物語を提示。
▷炭鉱中心主義的なあり方への批評的視座
- ・作品制作のみならず、リサーチや展示、運営などにも関わった芸術家の生態系を学ぶことができた。
- ・復興のリアリティの外側から地元を捉え直すことで、改めて地域の課題地域の魅力も見えてきた（気がする）
- ・在京、県外の作家たちとの関わりも生まれてきた

◇アートのなもの、捉え方の体験を積み重ねる

「一度炭鉱に蹴りをつけよう」と思い、自主企画として「しらみずアーツキャンプ」(2018-2019)を開催しました。いわき市や文化庁の助成も受け、ツアー型演劇や食のイベント、勉強会などを実施しました。観光だけではなく、芸術や福祉など色々な文脈に広がっていくことで、渦ができていくと思っています。実際に、山や集落で展示すると、地域のお年寄が友達を連れてきてくれるようになり、一緒に展示もするようになりました。アーティストがつけた火を熾火(おきび)状態にし、それを地元の人たちの中であたため続けられるようにしておく、地元の作家や地域活動をしている人たちとの接点ができ、次のアクションが生まれていきます。

芸術祭を通して、「こういう捉え方もあるんだ」「こういう風に見えるんだ」「こう表現するのは面白いね」といった体験を積み重ねることによって、「今、目の前にいる人が見ている風景ってのは違うのかもしれない」という想像力に結びつきます。それが少しずつ、「震災や放射能をどう捉えるかは、人によって違って当然だよ」というところにも繋がっていくのではと感じながら運営しています。

- ・これまでの経験を地元で炸裂
- ・地域課題を学ぶワークショップ、食堂、ツアー型演劇、作品展示
- ・地域の高齢者や表現者たちと共同して、旧産炭地にて開催
- ・いわき市の文化振興課との共同事業
- ・これまで芸術や演劇に触れてこなかった人たちも巻き込めた
▷食や福祉、まちづくり領域の皆さんと領域横断的に協働
- ・在京の芸術関係者も高く評価したが、年々予算が減少し閉幕
- ・ただ、ネットワークや「飛び火」自体は継続している
▷アートの捉え方、おもしろがり方のようなものを会得？

◇クリエイティブサポートレッツへの参画(2020-)

クリエイティブサポートレッツは、静岡県浜松市で、重度知的障害のある方たちが利用する生活介護の場所支援と表現活動を行うアート NPO です。私自身が作家（書き手）として呼ばれて、1年間、月に1回通いながら、彼らとの交流を通じて考えたことを文章にしていきました。レッツでは、一般の社会では迷惑行為に捉えられるような行動も、「表現未満」と捉えます。ずっと歌っていたり、紙をちぎったりしたい人がいるときに、「なぜ彼はこういうことをしたいんだろう」「彼は何か大事なことを今表現しようとしているんじゃないか」と捉えることで、怒ったり、「やめろ！」にいたる前の「間（ま）」が生まれます。障害の有無に関わらず、それぞれの中にある表現や創造性を大事にしないと、芸術なんて社会に浸透しません。価値観が揺らぐことで自省が促され、自身がどんどん変化していくように感じます。

- ・静岡県浜松市のアート NPO
- ・迷惑行為ではなく「表現未満、」として受け止めていく活動
- ・ライターとして1年間、月イチで宿泊して体験記を出版
- ・障害の有無に関係なく、その人の表現こそ創造性の種
 - ▷小名浜本町通り芸術祭でも考えていたことと共鳴
- ・社会に対する批判的精神、「問題が起きること」を大事にする
- ・これまでの自分の社会の捉え方、人の捉え方が揺らぎまくる
 - ▷アートプロジェクトで体験した価値観の揺らぎに似ている
 - ▷社会の外部から内部を突き動かすことが重要なのでは？

◇飛び火していく人をどうやって作るかが大事

表現や芸術を受け取った人が突き動かされ、そこから飛び火して行動していく人をどのように作るかが大事だと考えています。例えば、障害者福祉や芸術の当事者だけではなく、私のようなふわっとしたマジョリティーの立場の人間が、「芸術や表現の場って大事だよ」と発信していくとより伝わりやすいと思います。当事者の声を翻訳して、地域に届けていく役割の人がいた方がいい。つまり、アーティストが直接地元のおじちゃんに伝えるよりも、地域の事情を理解して対等に話せる人が仲介することで、余計なハレーションを起こさず、持続可能なものになります。

また、地域への経済効果や集客数を明文化しないと予算が取れないジレンマはありますが、それは重要なことではありません。行政の助成金だとどうしても目的遂行型になり、最初に提示した結論に沿って人を巻き込むしかないため、暴力的な構図になってしまいます。アートプロジェクトは何が起きるか分からないことが面白いところなので、トラブルや予定外のことを「漂流」したり、「共事」したりしながら活動をする必要があります。

自覚した役割、地域社会の課題

- ・障害福祉や芸術の「専門家」ではない人が語ることも大事だ
- ・領域横断的に動ける人たちがいないと文化が収奪されていく
- ・よそものであり、バカモノ的な「地元在住者」が必要
- ・つねに内と外を行き来できる人がいないといけない
- ・地域に対して翻訳していくこと、巻き込んでいくこと
- ・目的遂行ではなく、漂流と「共事」できる体制
- ・自治体からの要望も適当に応えていくスキルとコミュニケーション
- ・そういう人を地域の中で育てていくこと

【質問やコメント】

林：私は、公害資料館のネットワーク事務局を運営していますが、小松さんの発表を聞いて、「アートは価値観を揺さぶる」という点に共感しました。一方的に事実を伝えても価値観は揺さぶられませんが、アートはそこを双方向にできる可能性を秘めている。また、アートは参加のしやすさにつながる部分があると感じた。そのためにはやはりパブリックな場が必要だと思います。

また、貧困と公害の問題はリンクする部分があると感じました。現在資料館を、提供を受けた食べ物を配る場所にして、資料館を福祉につなげる拠点にしようとしています。この拠点と表現がどう繋がるか、可能性があるかを考えながら話を聞いていました。

志村：私はリボンアートフェスティバルを担当しています。震災をきっかけに、支援団体が出来たり、移住者が増えたりなど、これまでになかった動きが続いていると感じています。ずっとその地域に暮らしている方でも、馴染みがないものとして捉える方もいれば、積極的に関わったり出会ったりしていく方もいます。

今も答えはないと思いながらも、最近は無理して繋がる必要もないかなとも感じています。混ざる機会があれば嬉しいです。

ハキム：クアラルンプールにて、「KL Sketch Nation」という20名ほどのグループで活動しています。アーバンスケッチと言われる街中にスケッチに出かける形式で、メンバーはアーティストではなく、絵を描くことが好きな一般の人です。活動を通じて、街を再発見しながら、コミュニティを作っていきます。

この町が好きだから始めました。日常生活は忙しく、街中では早く歩くので、身の周りにあるものに気づかないことが多いです。そこで、まず道に座って一緒にスケッチすることで、より細かい部分まで見えたり、会話が始まって人との交流が生まれたりもします。

活動に期待していることは2つあり、①スケッチする人が自分たちの住んでいる街をもっと理解できるようになること、②街の人たちに、スケッチをしている人たちや活動を知ってもらうこと、この相互関係を求めています。

スケッチをする場所は、色んな活動が行われているところを選んでいきます。例えば、マーケットや地元のお店、工房などを選ぶことで、自分が住んでいる町の文化をもっと知ることができます。

成田：石巻市で災害を知る施設の見所などを教えてほしい。

矢口：石巻の南浜町には3つ施設があります。みやぎ東日本大震災津波伝承館、MEET 門脇、石巻市震災遺構 門脇小学校です。門脇小学校は、実際に使われていた仮設住宅に入れたり、被災した消防車を見たりすることができます。

阿部さん：そして、大川小学校(震災遺構)があります。津波で犠牲になった方のご家族が語り部をしています。

戸田：東松島には旧野蒜小学校を改装した KIBOTCHA (キボッチャ)。宿泊や子ども向けの遊具、震災を体験できる場所があります。

小松：福島は震災と原発事故の課題があります。津波に関しては、いわき震災伝承みらい館で語り部の話を聞くことができます。原発事故を考える場合は、いわき市石炭・化石館ほるるがおすすめです。ここでは、原発事故そのものを扱っているわけではないですが、エネルギー産業という大きな産業が、地域にどのような豊かさや貧しさをもたらしていくのか、震災前からある文化観を考えられる場所です。

その地域に元々どのような歴史があったのかを考えられる場所に行くことで、震災によって、受け継がれてきた文化や人々の思い入れみたいなものが負った傷が見えてくるのでは。あとは、美味しいものを食べに行ったりすることも、すごくいいことです。ランチや晩御飯をどこで食べるかも工程に入れると面白い旅になると思います。

瀬尾：震災から 12 年経つ今、コミュニティの中で震災の記憶を継承することのモチベーションを持てるかどうか。それがコミュニティに効果があると感じるか。

矢口：本当は「震災伝承」とあまり言いたくないです。小松さんが「擬態」というように、全面に押し出さず、自然と、結果的に震災伝承になっているのいいと思います。たとえば、主催側が「震災伝承演劇」と言うのではなく、見た人が「震災伝承演劇」と受け取る、という方がいいと思います。地元感覚でいうと、「震災伝承」というと身構えてしまうところがあるので、さきほど話したように、「エンタメ」に置き換えるみたいな。

阿部：大川小学校の卒業生が制作したドキュメンタリー映画の、地元では初の上映会をします。同様に、門脇エリアを追い続けた映画監督の作品上映も、全面的に協力したいと思っています。やっぱり地元で開催する意義や意味は大きいので。

また、被災した場所であるからといって同情してもらいたくはないですが、ここが被災した場所であること自体から目を背けるつもりもないです。だから、震災の記憶を薄れさせたくない活動している方の協力はどんどんしていきたいと思っています。

戸田：震災当時は、避難所暮らしで子どもがパニックを起こしたりなど大変な思いはあったが、震災をきっかけに東京からきた先生に出会ったり、てあわせの活動によって救われ

た面もあります。そのため、震災がなければ、うちの子はどのようなふう育ったのかと思うと、ちょっと複雑な気持ちです。

小松：伝えていくことはもちろん大事ですが、私には、みんなが忘れた頃に見つけてもらってからが「伝承の本番」というイメージがあります。だから、後世の人が、「なんか発見しちゃったけど、これって受け継がれてないじゃん」という時に、手がかりになるものをどこかに残しておくことが大事なのかなと。

防災意識や制度にインストールするようなタイプの伝承と、後世の人が、「当時の人たちの暮らしはどうだったのかな？」気づいた時に発見されて繋がっていくような、細いけど濃いタイプの伝承のふたつがあるのかなと。自分たちの世代はまだ伝承の世代ではないですけど、孫、ひ孫…100年後ぐらいに発見してくれる人がいて、繋がっていくんだと思います。